

## 比較文化紀行（ロンドン・東京）

—日英女性文芸サロン文化—モンタギュ夫人、平塚らいてふ、ヴァージニア・ウルフ—

浜田 一字

フェミニズムの原点ブルーストッキングサークル

夏目漱石は『文学評論』（1909）の中でモンタギュ夫人 (Elizabeth Montagu (1720-1800)) について次のように解説している。

女に少々学問が出来て、幾分かむずかしい談話に口を挟むようになったのは一八世紀の中頃以後の事である。その「青靴下」という字はこの時代から始まったのである。この「青靴下」の隊長はモンタギュ夫人であつて、当時の婦人の馬鹿で無学なのを慷慨するの余り率先して精神的修養を奨励したのである。千七百五十年に初めてかるたなしの伴侶を組織した。なるべく男子に愚弄せられないようにと奮発した。

エリザベス・エガー編集の『ブルーストッキング フェミニニズム』（*Bluestocking Feminism* 1999）の年譜千七百五十年をみると

ロンドンの一女主人としての生活が本格的に始まる

とある。フェミニズムの気運の誕生である。同書によればエリザベス・モンタギュは一七二〇年十月二日ヨークにて、マシュー、エリザベス、ロビンソン家の四番目の子供、長女として生まれ、二十一歳で国会議員のエドワード・モンタギュと結婚、翌年長男を出産するもけいれん発作で亡くしてしまう。一七六〇年ジョージ・リトルトン (George Lyttelton) の「死者たちの対話」(*Dialogues of the Dead*) の中にエリザベス・モンタギュの、対話二六「カドモス—ヘラクレス」、対話二七「マーキュリー—現代の一賢夫人」、対話二八「プルトーク—カロン—現代の一本屋」を含んで出される。一七六九年エリザベス・モンタギュ著「シエークスピアの才と著述に関する一評論」出される。一七七五年モンタギュ氏の死によって炭鉱を含む莫大な遺産を相続、その後一八〇〇年七九歳で亡くなるまで、激動の一八世紀後半をみつめながら、フェミニズムの観点を貫く一生であった。彼女の存命中、七六年アメリカ独立革命、八九年フランス革命、その後の混乱とナポレオンの台頭など、世界の政治の動き、産業革命の浸透の激動の時代をフェミニズムの視点より見つめ続けた。

世界の情報が様々の経路で入手し始め、出版の波が押寄せつつあったこの時代、新聞の発刊やコーヒー文化と称するロンドンのクラブの集いが盛んになっていった。当時の世相が、このモンタギュー夫人の女性によるサロンの誕生の雰囲気を高揚したことは考えられる。それは夫人と同時代のあの文学の大御所ジョンソン博士(Samuel Johnson 1709-84)の時代でもあった。漱石はこの男性中心のロンドンに広く流行したクラブ社会について次のように解説している。

最後に倶楽部というのは別段独立した建物がある訳ではない。上の珈琲店とかまたは料理店へ時を期して会員が聚るだけの話であるが、その数は非常なもので、毎夜沢山の会合があったものと思われる。調べて見ると倶楽部というのは当時流行物で、何でもかんでも倶楽部組織にしたように見える。

例のジョンソンはボスウエルのいえる如く倶楽部向きの男(clubbable man)であって生涯中色々な倶楽部に関係した。彼の作った辞書を見ると倶楽部の定義の下に「ある条件の下に会合する善良なる伴侶の集会」とあるのを見ても彼が倶楽部を如何に解釈したかが分かる。ジョンソンの関係した倶楽部の中で「倶楽部」後に「文学倶楽部」というのがある。彼らは毎日曜午後七時には必ず寄って晚餐をともした後、文学、科学及び美術の談話に夜を更かすのを以て例としておった。

このような世相の中で、モンタギュー夫人の、この男子の社交の場

を女性にも発想は自然であったと思われる。「ブルーストッキング フェミニズム」の編者のエリザベス・エガーによれば、そもそもこの集いの性格は、ブルーストッキングの名前からして、一八世紀のイギリス社会の風潮を反映したもので、まずブルーストッキングとは、当時紺の羊毛の梳毛糸、ウーステッドの靴下は、非公式の装い、質素な庶民着、職人、中低層階級を象徴し、豪華な正装、白や黒の絹の靴下に対する素朴な普段着の象徴を意味していた。しかも当時のイギリス市民社会の象徴である、男性の紳士のクラブに対抗した、女性も含むサークルという意味を持つとみなされる。きっかけは、会員の一人のベンジャミン・ステイリングという司教の冗談から出たらしく、初めは男性参加者をさしたものであったが、一七七〇年代までに女性を含む会の性格を表すようになったという。



Elizabeth Montagu  
From Wikipedia, the free encyclopedia

一八世紀半ばのオーストリア継承戦争、七年戦争、アメリカ独立戦争、フランス革命とその後の混乱など、激動の一八世紀の政治の男性に偏った変遷に対して、家庭にあって、家事育児に終始する当時の女性のステイタスを疑問視する主張も自然であると思われる。

編者のエリザベス・エガートの言葉を引用すると次のようになる。

ブルーストッキングという用語は、やがて一般化されるようになった。それはまた、少なくとも上流、中流階級では、女性は単なる家事にとどまらず、社会の効用や知的生活の探究に携わるべしなる主張に対する幅広い反発に使われる軽蔑の意味をこめて広まることになった。さらにこの用語はフランス革命及び、ロマン主義と一致する革命余波に対する論争の中で、軽蔑の意味は強められていったのである。重要なのは、この時期女性の知性偏重と社会活動が、革命の混乱や無秩序、そして暴力などと結びつけられたことである。逆説的に、当初のサークルのブルーストッキングの女性たちは、その後継者も含めてフランス革命とそのフェミニズムには敵対的のようであった。当初のブルーストッキングサークルの主要メンバーのよく知られた書簡の多くが、編集され、出版されたのは革命の余波の後であった。女性たちは家事の模範であると同時に社会慈善活動家にもなり得る、女性的であると同時に知性的でもあり得ることを示そうとする試みに於いても同様であった。このブルーストッキングの困難な歴史は、ブルーストッキングサークルとその活動及び彼女らが代表するものそれ自体が、社会、経済、文化、政治の変遷の幅広いプロセスにかかわっていたこと、その中にはジェンダーの本質、その関連とその役割の変遷によって包括され、影響を受けたものも含まれていたことがあげられる。

(The term Bluestocking became generalized. It also became

increasingly pejorative, used within a broad reaction against women's pursuit of intellectual life and social usefulness beyond mere domesticity, at least in the upper and middle classes. This disparaging usage intensified in the debate over the French Revolution, and especially during the Revolutionary aftermath that coincided with Romanticism. Significantly, this was when female intellectualism and social activism became associated with revolutionary disruption, disorder, and violence. Paradoxically, it might seem, the Bluestocking women of the original circle, as well as their followers, were hostile to the French Revolution and its feminisms, and it was following the Revolutionary aftermath that much of the familiar correspondence of leading members of the original Bluestocking circle was edited and published, quite likely in an attempt to demonstrate that women could be both intellectual and feminine, both social philanthropists and models of domesticity. This embattled history of 'Bluestocking' indicates the extent to which the Bluestocking circles, their activities, and what they represented were themselves interventions in broad processes of social, economic, cultural, and political transformation, which included and were affected by transformations in gender identity, relations, and roles. *Bluestocking Feminism* p.x)

この背景には植民地支配、王政による絶対体制、男性中心の戦争と家長支配、身分階級に対する庶民の疑問視する視点がみられる。おぼろげながらも民衆による自由社会へのヴィジョンが芽生え始めた一八世紀といえる。それが具体化し始めたのがアメリカの独立革命及びフランス革命であり、一七世紀の宗教改革、大航海時代を経た後の産業革命であった。紳士の政治、文化の談論風発クラブ文化に対抗した女性のサロンサークルの誕生も自然の成り行きといえる。

一七六二年十二月、エリザベス・モンタギューは *The Chronicle* 紙宛ての投書で、ある美術愛好家の会が、公園に会の建物建造を申請し、役所がこれを許可したことに抗議して次のように記している。

この美德のクラブとやうに宮殿の近くの土地が割り当てられるとか、そこでは、このビーフステーキクラブの不敬な音は静まり、途絶えるとか、騒かれるかもしれません。それは大いに結構、しかし宗教や善良な道徳心から発せられる情熱に満ちた響きは、どこぞの教区牧師の敬虔な温もりは、またどこぞの質素貞節な貴族は、そこで語られ歌われてきたものは、反復し報じることを必要とするはずです。美德、悪徳、美術愛好家なりがこの地に居を定めてしまえば、アルバートル通りに会を結成している独立自主の紳士たちに対して拒むことが可能でしょうか。これらの気高き会の大本であり、それぞれの美德や功績の由来である作家クラブは、きつと大きな割り当てを取るにちがいありません。そこには

神々の母の如く、頂点に櫓を頂いて誇らしげに卓越して聳え立ち、不滅の子孫たちを見晴らし、かくして、これまで病弱な老人たちが運動し、老人子供皆して健康と気分転換を求め、人々の無邪気なレクリエーションの場であった所が、暴動と騒乱の巷と化し、贅沢の養成所、悪徳の学院、派閥の訓練所となるであります。

(It may be said that a place nearest the Royal House will be assigned to the Virtue Club, in which the unhallowed sounds of the beef stake club will be silenced & expire. That would indeed be well, but perhaps the echo there from a zeal for religion & good morals, or some Parson of warm piety, or some Peer of austere chastity may think it necessary to repeat & report what has been said, or sung. When Virtue, & Vice, & Virtuoso ship have got an establishment in this situation can it be refused to the independent gentlemen who form the Society in Albemarle Street? Arthurs, which is the great Parent of all these Noble societies, & from whom the virtues & accomplishments of each are derived must certainly have a large area assigned to it. There with Turrets on its head, like the Mother of the Gods, it shall rise proudly eminent, & survey its immortal progeny and thus shall a place where valetudinarians took their exercise, the aged & the infants sought for health & refreshment, & the people innocent recreation, be turned into a scene of riot & debauchery, &

become the school of luxury, the Academy of Vice, & the  
Palestra of Faction. *Bluestocking Feminism* p.168)

男性中心の社会の中で、家庭を守るに甘んじてきた女性の平等の  
弁は、貴族の男子の社交クラブへの非難の矛先を皮切りに、モ  
ンタギュー夫人の著書、『死者たちの対話』の中の対話Ⅱ、「マーキ  
ュー—現代の賢夫人」では、死を迎えた一貴族の令夫人が、家族を  
ないがしろにして社交の集いに専心したと、冥界の使者マーキ  
ューに問い質される一節を問答している。

ミセス・モディシー—実はマーキュー様、私はあなたとこうして  
のんびり応対してられません。忙しいのです。本当に忙しく  
よ。

(Mrs. MODISH—Indeed, Mr. Mercury, I cannot have the  
pleasure of waiting upon you now. I am engaged, absolutely  
engaged.)

マーキュー—あなたには愛すべき優しいご主人とすばらしいお  
子様たちがおありになる。しかし夫婦の愛情も、子供への愛着  
も、王国の繁栄、国家の栄光への懸念も、死者の領域に召喚され  
た人の言い訳にはなりません。たとえ無慈悲な使者が、歓迎され  
ないほど頑なでなかったとしても、カロン（冥界の渡し守）が客  
を受け入れないことは、（時に心気症のイギリス紳士を除いて）  
百年に一度くらいでしょう。あなたはご主人とご家族を残してス

テオクス川（三途の川）を渡るのに甘んじなければなりません。  
5。

(MERCURY—I know you have an amiable affectionate  
husband, and several fine children: but you need not be told,  
that neither conjugal attachments, maternal affections, not even  
the care of a kingdom's welfare or a nation's glory, can excuse  
a person who has received a summons to the realms of death.  
If the grim messenger was not as peremptory as unwelcome,  
Charon would not get a passenger. (except now and then an  
hypocondriacally Englishman) once in a century. You must  
be content to leave your husband and family and pass the  
Styx.)

ミセス・モディシー—私は夫や子供たちと何らかの契約について主  
張するつもりはありません。私は、自分が夫や子供に雇用されて  
いると思ったことは一度もありません。私は何の契約もありません。  
でもそのようなことは、私のような身分の女性には普通のこ  
とですわ。暖炉飾りを見て下さいな、そうすれば私は月曜日は観  
劇、火曜日は舞踏会、土曜日はオペラ、そして週の残りの日々は  
トランプの集いと、来るべき二か月の間関わっているのがお分か  
りでしょう。そして約束を守らないことは一番礼を失する行為な  
のです。もしあなたが、夏の季節が終わるまで私のために留まって  
いただけるのでしたら心からお任せ申し上げますわ。おそらく極  
楽浄土とは、私たちの世界の国ほどいまわしくはないのではし

う。すてきなヴォクスホール（ロンドンの舞踏会や音楽会が催される公園）やラネラガーデン（ロンドン、チェルシーのロイヤル・ホスピタル隣接する公園でフラワーショウが開かれる）があることをお祈り致します。ずっと留まることになれば、レテ（冥界にある川）の水が嫌いでないこともね。

(Mrs. MODISH—I did not mean to insist on any engagement with my husband and children; I never thought myself engaged to them. I had no engagements, but such as were common to women of my rank. Look on my chimney-piece, and you will see I was engaged to the Play on Mondays, Balls on Tuesdays, the Opera on Saturdays, and to Card-assemblies the rest of the week, for two months to come; and it would be the rudest thing in the world not to keep my appointments. If you will stay for me till the Summer-season, I will wait on you with all my heart. Perhaps the Elysian Fields may be less detestable than the country in our world. Pray have you a fine Vauxhall and Ranelagh? I think I should not dislike drinking the Lethe waters, when you have a full season.)

マーキュリー—確かにあなたは「忘却」の水は飲みたくないでしょう。あなたは人生の仕事も目的も意図も楽しんでこられた。悩みを紛らすことは良いことだ。でも陽気で楽しかった人生の思い出を洗い流す人がいるのでしょうか。

(MERCURY—Surely you could not like to drink the waters of

Oblivion, who have made pleasure the business, end, and aim of your life! It is good to drown cares; but who would wash away the remembrance of a life of gaiety and pleasure?)

ミセス・モディッシュ—気晴らしは確かに私の人生の仕事でした。でも娯楽に関して私は無縁です。私の楽しみの新しさは消えてしまいましたから。同じものを何度も見て楽しい人はいるでしょうか。時間の遅さと疲れが私を憂鬱にし、私の生来の陽気な気質は損なわれてしまいました。私は深刺とした活発さを若いうちに消耗してしまいました。

(Mrs. MODISH—Diversion was indeed the business of my life, but as to pleasure I have enjoyed none, since the novelty of my amusements was gone off. Can one be pleased with seeing the same thing over and over again? Late hours and fatigue gave me the vapours, spoiled the natural cheerfulness of my temper, and even in youth wore away my youthful vivacity.)

マーキュリー—もしこの生き方が楽しみを与えてくれないなら、なぜこれ続けて来たのですか。あまり価値のあるものと思っていなかったのでしょうか。

(MERCURY—If this way of life did not give you pleasure, why did you continue in it? I suppose you did not think it was very meritorious.)

ミセス・モディシー私はあまりに煩わしさに紛れて全く考えられませんでした。これまでの私の生き方は実に満足のいくものでした。友人たちはいつも気晴らしが必要と言ってくれましたし、私の医師も、憂さ晴らしが私の精神には良いことを受け合っていました。夫はそうではないと言いましたが、普通は友の言い分を受け入れ、医師に従うを良しとし、夫には反駁するものではありませんか。おまけに私は「上品」の育ちであると思われないとあこがれていましたもの。

(Mrs. MODISH—I was too much engaged to think at all: so far indeed my manner of life was agreeable enough. My friends always told me diversions were necessary, and my doctor assured me dissipation was good for my spirits: my husband insisted that it was not, and you know that one loves to oblige one's friends, comply with one's doctor, and contradict one's husband: and besides I was ambitious to be thought du *bon ton*.)

モーキュリー—「上品」ですって、奥さんそれなんですか。ど  
うかはいさし説明してあげよう。

(Mercury—*Bon ton!* What is that, Madam? Pray define it.)

ミセス・モディシーまあ 閣下、申し訳ありません。「上品」の特権の一つは、決めつけたり決めつけられたりしないことです。これは難解な表現の子でもあり親でもあるのです。それは何かは

云えませんが、そうでないものはなんとかお教えしてみましよう。会話に機知はなく、作法に丁寧さがなく、態度に物腰の良さはありません。それでいてそのすべてにやや類似性があります。それは一定の階級の人々のみに当てはまることといえましょう。一定の作法で生活し、一定の人格を持ち、一定の美德は持たないのに一定の悪徳は有する、都市の一定の個所に住むのです。儀礼の場所のように人が求めるよりも高い位置に達していても、人々はある競争をしないように優先権の合法的な称号を有する。丁寧の法則もわきまをなうと思われるのを恐れるものです。まあ私は知っている限りのことをお伝えしました。私が生涯かけてあこがれ、目標にしていたことです。

(Mrs. MODISH—Oh Sir, excuse me, it is one of the privileges of the *bon ton* never to define or be defined. It is the child and parent of Jargon. It is, I can never tell you what it is: but I will try to tell you what it is not. In conversation it is not wit: in manners it is not politeness: in behaviour it is not address: but it is a little like them all. It can only belong to people of a certain rank, who live in a certain manner, with certain persons, who have not certain virtues, and who have certain vices, and who inhabit a certain part of town. Like a place by courtesy, it gets an higher rank than the person can claim, but which those who have a legal title to precedence dare not dispute, for fear of being thought not to understand the rules of politeness. Now, Sir, I have told you as much as I know of it,

though I have admired and aimed at it all my life.)

マーキュリー—それでは奥さん、あなたは時間を浪費し、美しさも色あせ、健康を害してしまいましたね。ご主人に反駁して、この「上品」とやらの、あるのかないのか分からないもの、という御大層な目的のためにです。

(MERCURY—Then, Madam, you have wasted your time, faded your beauty, and destroyed your health, for the laudable purposes of contradicting your husband, and being this something and this nothing called the *bon ton*)

ミセス・モディシー—私はどうすべきだったのかしら。

(Mrs. MODISH—What would you have had me do?)

マーキュリー—あなたのご教示のやり方を真似しましょう。私がおあなたにして欲しくなかったことを言います。流行と愚行のために、あなたの時間と理性と義務を犠牲にすべきではありませんでしたよ。私はあなたに、あなたのご主人の幸せとお子さんの教育を怠ってはしくありませんでした。

(MERCURY—I will follow your mode of instructing. I will tell you what I would not have had you do. I would not have had you sacrifice your time, your reason and your Duties, to fashion and folly. I would not have had you neglect the happiness of your husband, and the education of your children.)

ミセス・モディシー—娘の教育に関して私は何ら出費を惜しませんでしたわ。彼女たちにはダンスの先生、音楽の先生、絵の先生がいましたし、さらに行儀作法とフランス語教えるフランス人の家庭教師がいましたから。

(Mrs. MODISH—As to the education of my daughters, I spared no expense: they had a dancing master, music master, and drawing master; and a French governess to teach them behaviour and the French language.)

マーキュリー—それでは、彼女たちの宗教、情操、礼儀作法はダンスの先生、音楽の先生、そして部屋係のメイドから教わったというのですね。おそらくそのような教師たちが、「上品」を身につけるように計らったかもしれませぬ。あなたの娘さんたちは、きつと夫婦の情愛のない妻、母としての配慮のない母親になるに適切な教育をされたことでしょう。私は彼女たちが始めた生活、あなたが結論付けたことが気の毒です。ミノス（冥界Hadesの判官）は気難しい老紳士で「上品」のかけらもない。だから私はあなたがどうなるか怖い。私がおあなたに忠告できる最善のことは、あなたがあちらの世界でした通りにこちらでもすること、あなたの視点で喜びを持ち続けること、ただし決してあちらの世界に繋がる道をとってはけません。ステュクス川のこちらに留まることです。目的もあてもなくさまよい、極楽浄土を覗いてもよろしい、ただし決してその中に入ろうとしてはだめです。ミノス



があなたをタルタルス（冥府の下の日の差さない深みで冥府の悪人を懲罰する所）に押し込めないように。義務の怠慢は罪を犯すことに勝るとも劣らない宣告をもたらすかもしれないから。

(MERCURY—So their religion, sentiments and manners were to be learnt from a dancing master, music master, and a chambermaid! Perhaps such instructors might prepare them to catch the *bon ton*. Your daughters must have been so educated as to fit them to be wives without conjugal affection, and mothers without maternal care. I am sorry for the sort of life they are commencing, and for that which you have just concluded. Minos is a sour old gentleman, without the least smattering of the *bon ton*, and I am in a fright for you. The best thing I can advise you is to do in this world, as you did in the other, keep happiness in your view, but never take the road that leads to it. Remain on this side Styx: wander about without end or aim; look into the Elysian Fields, but never attempt to enter into them, lest Minos should push you into Tartarus: for the neglect of Duties may bring on a sentence not much less severe, than the commission of Crimes.)

冥界の使者マーキュリーが、死者としてモディシ夫人を出迎えた際のやり取りが交わされ、生前の生き方を問われて、内容の中心点は富裕な主婦の夫や子供の世話、家事育児の合間に、上流社交の貴族の集いの参加を、さらに主婦としての義務の怠慢を指摘された対

話である。女性の生き方の新たな視点の台頭と、女性の社会活動への参入の主張が展開されている。当時の「ブルーストッキング」の集いと、富裕階層の令夫人たちの生活の一端を窺い知ることのできる対話である。

平塚らいてふと雑誌「青踏」

漱石の「文学評論」が出てから二年後、一九一一年九月一日、雑誌「青踏」は出された。発起人として平塚明子（らいてふ）ら五人、賛助員として与謝野晶子、国木田治子（独歩夫人）ら七人が名を連ね、表紙は長沼智恵子（高村光太郎夫人）が担当し、主な著作のジャンルは、詩、俳句、短歌、小説、戯曲、そして翻訳エドガー・アラン・ポーの「影」とイブセンの「ヘッダ・カブラー」という劇に対するメレジロウスキーの評論が載っている。巻頭を飾っているのは与謝野晶子の「そぞろ」という詩である。

山の動く日来る。

かく云えども人われを信ぜじ。

山は姑く眠りしのみ。

その昔に於いて

山は皆火に燃えて動きしものを。

されど、それは信ぜずともよし。

人よ、ああ、唯これを信ぜよ。

すべて眠りし女今を自覚めて動くなる。



与謝野 晶子

出典：フリー百科事典『ウィキペディア』

一人稱にてのみ物書かばや  
われは女ぞ。

一人稱にてのみ物書かばや。  
われは。われは。

額にも肩にも

わが髪ぞほつるる。

しをたれて湯瀧にうたるるころもち。

ほとつくため息は火の如く且つ狂ほし、

かかること知らぬ男。

われを褒め、やがてまた譏るらん。

われは愛づ、新しき薄手の玻璃の鉢を。

水もこれに湛ふれば涙と流れ。

花もこれに投げ入るれば火とぞ燃ゆる。

愁ふるは、若し粗忽なる男の手に砕け去らば—  
素焼の土器より更に脆く、かよわく。

明治四四年九月一日、『青鞥』第一号の巻頭の詩より、一貫して詩や短歌を掲載していた賛助会員与謝野晶子は、芸術家に徹すると同時に、十一人の子供の母なる女性の生き方を貫いて、後に、雑誌『太陽』誌上に於いて次のような主張を展開し、同じ『青鞥』同士の平塚らいてふとしばしば母性論争をくりひろげる。

まして絶対に母性中心を以て生涯を終始することは私が絶対に芸術性中心をもって生涯を終始するのと同じやうに不可能である。さうして此不可能は私ばかりでなく一切の女の上に言ひ得ることである。例へば私が自分の子供に乳を吞ませようと注意した時に私の現在は母性を中心として生きて居るが、次の刹那にまだ自分の乳房を子供の口に含ませて居るに関わらず、最早私の生活の中心は移動して、私は或一篇の詩の構想に熱中して居ることがある。前の私が母性中心の状態にあることは其時私の子供の哺育のために必要である。其必要に用立った後に私の母性が中心の地位を次に登って来た芸術性に譲り、其芸術性の無数な背景の一つとなって私の意識の奥に遠退いてしまふのは当然である。二つの物は同時に同じ位地を占め得ない。子供を哺育する時に専ら母性中心であり、詩を作る時に専ら芸術性中心であるからこそ哺育と詩作の二つの事が私の生活に遂げられるのである。私はどうしても絶対的母性中心の生活を営みうる状態を想像することが出来な

い。(香内信子編『資料母性論争』三三三頁)

晶子は詩集『母の歌』で自らの五歳の四男アウギユストを賛美して

アウギユスト、アウギユスト、

母の粗末な藝術なんかが

ああ、何になろう。

わたしはそなたに由って知ることが出来た、

眞實の彫刻を、

眞實の歌を、

眞實の音楽を、

そして眞實の愛を。

と綴っている。母性と芸術の両立をごく自然な現象として捉えた発想である。それは平塚らいてふの母性保護母性偏重と相容れないも



平塚 らいてふ

出典：フリー百科事典「ウィキペディア」

のとなっていく。らいてふの『青鞥』発刊号の文は(感想)というジャンルのもと、「元始女性は太陽であった」が、『青鞥』発刊に際してという副題を付して掲載されている。

元始、女性は実に太陽であった。真正の人であった。

今、女性は月である。他に依って生き、他の光によって輝く、病人のような蒼白い顔の月である。

偕てここに「青鞥」は初聲を上げた。

現代の日本の女性の頭脳と手によって始めて出来た「青鞥」は初聲を上げた。

女性のなすことは今は只嘲りの笑を招くばかりである。

私はよく知っている、嘲りの笑の下に隠れたる或ものを。

そして私は少しも恐れない。

併し、どうしよう女性みづからがみづからの上に更に新たにした羞恥と汚辱の惨ましさを。

女性とは斯くも嘔吐に値するものだろうか、

否々、真正の人とは――

私共は今日の女性として出来る丈のことをした。心の総てを盡してそして産み上げた子供がこの「青鞥」なのだ。よし、それは低能児だろうが、奇形児だろうが、早生児だろうが仕方がない、暫くこれで満足すべきだ、と。

果して心の総てを盡したろうか。ああ、誰か満足しやう。

私はこゝに更により多くの不満足を女性みずからの上に新にした。

女性とは斯くも力なきものだろうか、

否々、真正の人とは――

ここからいてふの視点は日本の女子教育の貧困へと展開する。

自由解放！女性の自由解放と云う聲は随分久しい以前から私共の耳邊にざわめいている。併しそれが何だろう。思ふに自由と云い、解放と云う意味が甚しく誤解されてはしなからうか。尤も単に女性解放問題と云つても其中には多くの問題が包まれていたらう。併し只外界の壓迫や、拘束から脱せしめ、所謂高等教育を授け、廣く一般の職業に就かせ、参政権をも與へ、家庭と云ふ小天地から、親と云ひ、夫と云ふ保護者の手から離れて所謂獨立の生活をさせたからとてそれが何で私共女性の自由解放であらう。成程それも眞の自由解放の域に達せしめるによき境遇と機會とを與へるものかも知れない。併し到底方便である。手段である。目的ではない。理想ではない。

とは云へ私は日本の多くの識者のやうな女子高等教育不必要論者では勿論ない。「自然」より同一の本質を受けて生まれた男女にはこれを必要とし、一はこれを不必要とするなどのことは或國、或時代に於て暫くは許せるにせよ、少しく根本的に考へればこんな不合理なことはあるまい。

私は日本に唯一つの私立女子大學があるばかり、男子の大學は容易に女性の前に門戸を開くの寛大を示さない現状を悲しむ。併し一旦にして我々女性の知識の水平線が男性のそれと同一になつたとしたところでそれが何だらう。抑も知識を求めるのは無智、無明の闇脱して自己を解放せむが為に外ならぬ。然るにアミイバのやうに食り取つた知識も一度眼を拭つて見れば殻ばかりなのに驚くではないか。そして又我々は其殻から脱する為め多くの苦闘を余儀なくせねばならないではないか。一切の思想は我々の眞の智慧を暗まし、自然から遠ざける。知識を弄んで生きる徒は學者かも知れないが到底智者ではない。否、却て眼前の事物其儘の眞を見ることの最も困難な盲に近い徒である。

さらに第三号編集後の雜感想として次のように女性の進展を喚起する。

生命の流れは刻一刻に進化し今や世界の人類は漸く人間の境界を脱し、今日の人間以上のものに進化しやうと、意識的にせよ、無意識的にせよ日夜に血眼になつて努力してゐるではありませんか。我々は昔の人が考へたやうな一定不變のものではありません。實に變化性に富んだ、日に日に新たに、より美しく、より強く、より大きく、より秀れたものとなり、かくて無限に進化すべき前途を有つて居るものです。ひとり女のみ生物進化の理法に洩れて、まだ人間の仲間入りも出来ないと言ふやうな、そんな不公平な自然の法則はない筈です。私共の意志を以て進化の力を増進

するばかりか、それを早めるやうに努力せねばならないでせう。  
〔青鞥〕第三号一〇四頁〕

女性のための女性による雑誌「青鞥」の誕生に最も影響を与えたのは、イブセンの「人形の家」に代表される北欧のフェミニズムの動き、特にスウェーデンの女性解放論者エレンケイ女史の思想が強い。山川菊枝は一九一八年九月の「婦人公論」誌上に於いて「母性保護と経済的独立へ与謝野、平塚二氏の論争」と題して次のように解説する。

婦人に於ける個人を強調し、教育の自由、職業範囲の拡張、経済的独立に出發して参政権の要求に終わつて居られる晶子氏の主張は、一八世紀末葉に欧州に生まれて、一九世紀後半に及んで世界の大勢となつた普通に所謂女権運動の伝統を繼承して居られるもので、それ以上のものでなければそれ以下のものでもないものやうに思はれる。

然るに、婦人に於ける性を強調し、両性の機會の均等から起る弊害を説き、母たる権利及び母たることに伴ふ権利を主張せらるる明子（らいてふ）氏の説は、旧來の女権運動に對抗し、その補足として又は修正案として一九世紀初頭に北歐に起つた母権運動の系統を惹いて居られる。

この二つの運動は各々時代の必要に応じて生れたもので、孰れも時代の精神を反映して居ることは、他の凡ての社会運動と其採を一にして居る。即ち旧來の女権運動に就て云へば、それは資本

主義の勃興に伴う社会的變化に順應する必要上發生し成長し來つたものであつて、その主張は本来資本主義的社会の肯定に出發し、たださういふ社会の内部に於て、いかに婦人により多くの権力を持たしむべきかの一点に専ら精力が集注されて居る。過去半世紀に於ける婦人の智的進歩や、諸方面の能力の發達等に現はれたこの運動の功績は、元より否み難き事實である。（香内信子編「資料母性保護論争」一三二頁）

北歐の婦人解放運動の「青鞥」の發刊への影響の中でイブセンの「人形の家」は大きい。第一号、第二号ではイブセンの戯曲「ヘッダ、ガブラー」についての意見が載り、第二卷第一号では「附録ノラ」と題する特集が生まれ、社員のノラ批評及感想の他、ジャネット・リーとバーナード・ショウのそれぞれ「人形の家」論、松井須磨子談として「舞台の上で一番困つたこと」が掲載され、それぞれ舞台での写真やアグネス・ソーマと須磨子のノラに扮する写真がフルページで紹介されて居り、当時としては極めて画期的な「人形の家」紹介であつたと推察できる。主人公の弁護士妻の妻ノラが夫と四人の子供を残して家を出る新しい女の代名詞、女性の平等の人格の確立として世界中の女性に絶賛を以て迎えられた。演劇記者であつたバーナード・ショウは、ロンドン初演の「人形の家」のノラの台詞「私はあなたの人形妻だつた」を、やがて「ビグマリオン」のイライザのヒギンズ教授への台詞「私はあなたの足のゴミではありません」に反映させている。「青鞥」第二卷第一号「社員の批評及感想——人形の家より女性問題へ」では

ノラの社会的覚醒は主観と客観との衝突で有る。衝突して其何れにも疑を生じたので有る。今までのノラは、ホンの小さい狭い主観の世界に生きて来た。然し其狭い感情的な主観を以ては、とてもすべての廣い大きい客観世界に即ち人生のすべてを解釋する事は出来ぬ。單純な原始的な主観を以ては、到底、複雑な、紛糾している人生を判断する事は出来ぬ。

ノラの人格を二重性として分析しているものもあれば、ノラへの意見として、その生き方を批判しているものもある。

ノラさんあなたのやうに徹頭徹尾、本能的な盲目的な女が十四五の小娘なら知らず三人の母親としてあらうとは日本の女には一寸信じられません。

ノラさん、あなたは何よりか第一に私は人間ですと仰有つて、「人形の家」をお捨てになつた。けれどまだあなたは人間になつたではありません。何でも人間にならねばならぬ、とやつと氣付かれた丈です。その人とは果たしてどんなものかはまだご存じない。あなたは御良人に「あなたと同じやうに私も人間です」と仰有つたけれど實はあなたの御良人も種類こそ違ひますが矢張り人形でした。人為的な法則といふものに支配されていらつしやる人形です。獨立した何ものもお有ちにならない。物の根底に少しも触れていらしやらない。

女性の新しい生き方を主張する「青鞥」の真髓はこのよ様な「人形の家」への解釈が根底となつてゐることが窺える。

ヴァージニア・ウルフとブルームズベリーグループ

漱石が「文学評論」の中で引用した「一八世紀の英国思想史」の著者で文芸評論家のレズリー・ステイブンは八人の子供がいたが、末娘のヴァージニア・ステイブンは、一九〇四年父の死を契機に、大英博物館やロンドン大学に近い、ブルームズベリー地区の一角、ゴードン・スクエア四十六番地に、姉のヴァネッサと二人居を定めて、以後美人姉妹を目当てに、二人の兄たちのケンブリッジ大学の友人たちが集まり始め、木曜会のサロンが始まる。やがて芸術家、評論家、知的エリート集団、ブルームズベリーグループのサロン文化が結成されていく。

メンバーの中には経済学者のメイナード・ケインズ、伝記作者リットン・ストレイチー、画家のダンカン・グラント、美術評論家で、後にヴァージニアの姉ヴァネッサと結婚するクライヴ・ベル、同じく美術評論家のロジャー・フライ、小説家ロズフォースター、そしてセイロンの行政官で後にヴァージニアと結婚するレナード・ウルフラがいた。そこでこの会の性格が snobbish (知識を鼻にかけた)、high brow (インテリぶった)、arty (芸術家ぶった)、Bohemian (自由奔放で因習にとらわれない生活をする人) の集団ブルームズベリー・グループが生まれた。特にメンバーに強調され

るのがE.M.W.の面で、メンバーの多くに、芸術こそこの世で最も大切なもの、人類が到達した最も高貴な表現という意識が浸透していた。そして彼らはこの信念を実践していったのである。つまりこの信条を小説に、伝記に、美術評論に取り込んで、イギリス絵画にきわめて重要な貢献を果たしたのである。やがてそれは芸術にとどまらず、経済や国際事情にも重要な影響を与え、高度に洗練された知的自由人たちの集団へと化していった。

それは大学に進んだ兄たちに対して、女性を家庭を守る存在とした十八世紀の古い観念の父ステイヴンによって、大学へは進めなかつたヴァンネッサとヴァージニア姉妹に、格好の生き方の主張の場を与えたものでもあつた。それはやがてヴァージニアの『私ひとりの部屋』(一九二九)において強く訴えられていく。ヴァージニアにとって、父ステイヴンには、父と子の関係に於いて、家族の間で、常に父親の子供に対する行動の基準と儀式めいた規制があり、自由といえるものは見られなかつた。息子たちは陸海軍以外はいかなる職業も許されたのに対し、娘たちの教育には寸部の配慮も顧みらず、自由など程遠いものであつた。この父の死を契機にブルームズベリーグループのボヘミア的自由奔放さが、グループの意識の中に浸透していくことになる。

J.K.Stoneの『ブルームズベリー・グループ』(The Bloomsbury Group, 1954)によれば、それは決してサロンといえるような性格ではなかつたようで、当時のヴァージニアは、極めてはにかみ屋で、仲間を呼んでホステス役など勤まるふうではなかつた。彼女はよく議論に耳を傾けてはいたものの、時に口を挟む場合、隣の者に

その発言は向けられるのが常だつたようである。



Virginia Woolf  
From Wikipedia, the free encyclopedia

ヴァージニア・ウルフはその著『私ひとりの部屋』(A Room of One's Own)の中で次のように述べている。

女性はこの数世紀の間男性の姿を普通の大きさの2倍に映し出すという快適な魔の鏡の役目を果たしてきた。女性のこの力がなかつたら、地上はいまだに沼地とジャンゲルのままであつたらう。われらがすべての戦いの栄光は未だ知られずにいたであろう。羊の骨の残骸に鹿の外郭を描いたり、火打石と羊の革の物々交換をしたり、素朴な装飾品が、私たちの洗練されていない好みを惹いたりしていたであろう。超人や運命の指などは決して存在しなかつたであろう。ツアームカイゼルも冠を戴いたり失つたりすることもなかつたであろう。文明化された社会で、鏡がどう利用されてもそれはすべての暴力と英雄行為の本質である。だからナポレオンとムツソリーニ、二人ともあれほど強く女性の劣性を言い張つたのである。というのは、もし彼らが劣つていなかった

ら大きく見せることはしなかつたであらう。それは、女性が男性と対等である必要がしばしば生じていることを、多少なりと説明するのに役立つ。その上男性は、女性の批判のもとではいかに不安であるか、女性が男性に対してこの本が悪い、この絵は弱い、或いはそれがなんであろうと、同じ批判をして、男性よりも怒りを増したり、苦痛を与えずの批判がいかに不可能かを説明するのに役立つ。というのはもし彼女が真実を語り始めたら、鏡の姿は縮み、彼の人生への適応は消失してしまう。もしも朝食や夕食、一回の自分の真の大きさの自分の姿が見えなければ、いかにして彼は判断を下し、天性を教化し、法律を作り、本を書き、服装を整え、宴会で演説をするだろうか。そこで私はパンをはぐし、コーヒーをかき混ぜ、時々通りの人たちを眺めながら省みる。鏡の映像は活力に変化を与え、神経組織を刺激するのに極めて大切である。もしそれを取り去られたら、男はコカインを奪われた麻薬中毒者のように死んでしまうかもしれない。

(Women have served all these centuries as looking glasses possessing the magic and delicious power of reflecting the figure of man at twice its natural size. Without that power probably the earth would still be swamp and jungle. The glories of all our wars would be unknown. We should still be scratching the outlines of deer on the remains of mutton bones and bartering flints for sheep skins or whatever simple ornament took our unsophisticated taste. Supermen and Fingers of Destiny would never have existed. The Tsar and

the Kaiser would never have worn crowns or lost them. Whatever may be their use in civilized societies, mirrors are essential to all violent and heroic action. That is why Napoleon and Mussolini both insist so emphatically upon the inferiority of women, for if they were not inferior, they would cease to enlarge. That serves to explain in part the necessity that women so often are to men. And it serves to explain how restless they are under the criticism; how impossible it is for her to say to them this book is bad, this picture is feeble, or whatever it may be, without giving far more pain and rousing far more anger than a man would do who gave the same criticism. For if she begins to tell the truth, the figure in the looking-glass shrinks; his fitness for life is diminished. How is he to go on giving judgment, civilizing natives, making laws, writing books, dressing up and speechifying at banquets, unless he can see himself at breakfast and at dinner at least twice the size he really is? So I reflected crumbling my bread and stirring my coffee and now and again looking at the people in the street. The looking-glass vision is of supreme importance because it changes the vitality; it stimulates the nervous system. Take it away and man may die, like the drug fiend deprived of his cocaine.)

J.K. Johnstone によれば、ヴァーシニア・ウルフの進歩は、その



結婚生活と同様ブルームズベリーの活動に帰するところ大であった。芸術家としても個人としても、これほど気のあった仲間意識、共通のバックグラウンド、自由な境遇は、何より得難いし、彼女は興味と視点を共有する集団に身を置いたといえる。メンバー一人一人がそれぞれの分野で傑出した知性と才能を発揮したエリート集団であった。彼らの個性と感性が芸術に対する深い造詣と結びついて、互いに影響し合い、共鳴し合って、政治にも経済にもそして社会にも関心を示して、それが個人一人一人以上の自信と能力の発展に繋がって集団の大きい優位性をみせたのである。ヴァージニアの小説にあるいはその他著述の数々に見られる鋭い感性と批判の自信はこのようなブルームズベリーのグループ力が支えとなっていたことは大いに考えられる。

「私ひとりの部屋」の中の主張はさらに「ブルーストッキング」にも言及する。

一八世紀が迫りくる中で、何百人という女性が、教科書にも記録されるのをためらうような無数の程度の低い小説を書いたり、訳したりしてお小遣いを増やしたり、家計を助けるようになったが、それらはチャリング・クロス通りの四ハニー箱に収納されたりもしている。一八世紀後半、女性たちに見られた徹底した精神活動—古典の翻訳からシェイクスピアの論評、集いと語らい—など、女性が著述活動によってお金を稼げるという確たる実績に基づいたものである。たとえ支払われなくとも、金銭は軽薄なものに尊厳を与える。やたらに書き散らしたい疼きを覚えた「ブルーストッキング」を冷笑するのもまた良いでしょう。しかし彼女た

ちが財布にお金を入れることが出来たのも否定できない事実である。かくして一八世紀の終わりにかけてある変化が訪れたのである。もし私が歴史を書き換えるならば、そのほうが十字軍やばら戦争よりも重要性を持った、もっと充実したものを描いたでしょう。中産階級の女性たちがものを書き始めたということです。もし「高慢と偏見」をとりあげ、さらに「ミドルマーチ」が、また「ヴェレッテ」がそして「嵐が丘」を問題にするならば、私は、女性が単に孤独な一族として田舎住まいの二つ折れ本やおせじに囲まれていないで、総合的に著述にとりかかったことを一時間かけて議論し、証明することの方がはるかに重要である。

(Hundreds of women began as the eighteenth century drew on to add to their pin money, or to come to the rescue of their families by making translations or writing the innumerable bad novels which have ceased to be recorded even in text-books, but are to be picked up in the fourpenny boxes in the Charing Cross Road. The extreme activity of mind which showed itself in the later eighteenth century among women—the talking, and the meeting, the writing of essays on Shakespeare, the translating of the classics—was founded on the solid fact that women could make money by writing. Money dignifies what is frivolous if unpaid for. It might still be well to sneer at 'blue stockings with an itch for scribbling', but it could not be denied that they could put money in their purses. Thus towards the end of the eighteenth century a change came

about which, if I were rewriting history, I should describe more fully and think of greater importance than the Crusades or the Wars of the Roses. The middle-class woman began to write. For if *Pride and Prejudice* matters, and *Middlemarch* and *Villette* and *Wuthering Heights* matter, then it matters far more than I can prove in an hour's discourse that women generally, and not merely the lonely aristocrat shut up in her country house among her folios and her flatters, took to writing.)

一八世紀に始まったジョンソン博士や、タトラー、スペクテイターの新聞発行のアイソン、ステイールらのロンドン、コーヒー店男子社交クラブの繁栄に対抗して、富裕層の女性サロン、エリザベス・モンタギュー夫人のブルーストッキングサークルは、ヴァージニアウルフには冷笑の対象であったようであるが、女性の著述活動への進出、女性作家の輩出は、ヴァージニアにとってブルームズベリィグループや夫レナードと設立したホガース社の背景と共に、世界でただ一人自由にもが書ける女としての自負と活力の源泉となっていたのである。ブルームズベリィの活動と並行して、日本の「ブルーストッキング」【青鞥】社の活動もまた集団の勢いと世界に生まれつつあった女性解放の機運に乗じた現象と化した運動の一端であった。

関係事項年譜

- 一七五〇 モンタギュー夫人ロンドンでサロンホステス
- 一七五五 ジョンソン博士『英語辞書』出版
- 一七五六年 七年戦争
- 一七六〇 ジョージ・リトルトン『死者たちの対話』（モンタギュー夫人の三編を含む）出版
- 一七七六 アメリカ独立宣言
- 一七八九 フランス革命
- 一七九六 ナポレオン・ボナパルト台頭
- 一七九八 ワーズ・ワース、コールリッジ『抒情歌謡集』出版
- 一八七九 ヘンリック・イブセン『人形の家』コペンハーゲン初演
- 一九〇〇 夏目漱石 ロンドン留学
- 一九〇五 ブルームズベリィ・グループ木曜会
- 一九〇九 夏目漱石『文学評論』出版
- 一九一一 文芸雑誌『青鞥』発刊
  - 文芸協会松井須磨子主演『人形の家』初演
- 一九一四 ジョージ・バーナード・ショウ『ビッグマリオン』初演
- 一九一八 イギリス部分的婦人参政権（既婚婦人対象）
- 一九一九 イギリス性差別撤廃令
- 一九二〇 アメリカ婦人参政権
- 一九二五 ヴァージニア・ウルフ『アーサー・ウェイリー訳』
- 一九二九 ヴァージニア・ウルフ『私ひとりの部屋』出版

- 一九四五 日本婦人参政権  
一九四九 シモーヌ・ド・ボーボアール 『第二の性』 出版

参考文献

- Elizabeth Egeredo *Bluestocking Feminism* Pickering & Chatto 1999  
Virginia Woolf *A Room of One's Own* Penguin Books 1929  
J. K. Johnstone *The Bloomsbury Group* Secker & Warburg 1954  
現代文芸思想資料集『青鞥』 明治文献版第一巻〜第五巻  
香内信子編 『資料母性保護論争』 ドメス出版 一九八四  
新・フェミニズム批評の会編 『「青鞥」を読む』 学藝書林一九九八  
原 千代海訳イブセン『人形の家』 岩波文庫一九九六  
橋口 稔著『ブルームズベリー・グループ』 中公新書一九八九